

# 令和5年度 下野市中学生平和研修派遣事業 報告書



広島県 広島市

令和5年8月5日(土)～8月7日(月)



下野市

## 市長あいさつ



下野市長 坂村 哲也

終戦から78年を迎え、私たちにとっては、今過ごしている平和な毎日が、当たり前前の日常になっているかと思えます。

しかしながら、世界に目を向けますと、様々な国が核兵器を保有しており、また、一部ではその使用を示唆するような状況が、今現在起きています。被爆者の方々をはじめ、戦争を知る世代は年々少なくなってきましたが、次代を担う方々に、核兵器についての正しい知識を引き継ぎ、今ある当たり前前の日常の大切さ、そして、平和の尊さや生命の尊厳について伝えていくことが、我々の大きな役割だと感じています。

下野市は、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を願い、平成18年6月16日に「非核平和都市宣言」を行いました。

下野市と壬生町が合同で実施している中学生平和研修派遣事業は、非核平和都市宣言の推進及び平和学習活動の一環として取り組んでおります。

令和2年度から令和4年度の間は、新型コロナウイルス感染症対策のため残念ながら中止となりましたが、今年度は4年ぶり7回目の実施となりました。

また、今年度については、この事業の本来の対象者である中学校2年生及び義務教育学校8年生の生徒に加えて、昨年度参加予定であった中学校3年生及び義務教育学校9年生も含めた派遣団となりました。

派遣団の生徒の皆さまには、8月6日に行われた平和記念式典への出席をはじめとし、広島平和記念資料館、広島二中原爆慰霊碑及び原爆ドームの見学、原爆の子の像への千羽鶴奉納、被爆体験伝承講話の受講などを通して、広島で過去に起こった出来事が、紛れもない事実であるということを目と耳で見聞きし、それらの歴史を経た広島の今についても学んでいただきました。

教科書や本でしか見ることのできなかつた建造物や、展示物を目の当たりにし、その学びから心で感じたことを、今後の生活において忘れることなく、平和な社会を継続させていくための第一歩を踏み出してくれることを期待しています。

そして、その一歩が輪となって広がり、たくさんの方々にとって、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さ、平和の尊さについて考えるきっかけとなっただけであれば幸いです。

最後になりましたが、本事業実施にご協力いただきました生徒やその保護者の皆さま、学校関係者等多くの方々から心から御礼申し上げます。

「下野市・壬生町中学生平和研修派遣事業に参加して」

下野市・壬生町中学生平和研修派遣団団長 塩沢 建樹

令和5年8月5日（土）から7日（月）までの3日間、下野市・壬生町中学生平和研修派遣団団長として、中学生と共に広島での研修に参加してきました。今回は、4年ぶりの実施となり、昨年度、団員に選ばれたが中止のため参加できなかった生徒も団員として参加しました。派遣団は、下野市4校の中学2年生6名、義務教育後期課程8年生2名、中学3年生6名、義務教育後期課程9年生2名と壬生町2校の中学2年生4名、中学3年生2名及び各市町からの引率教員として、教諭3名、各市町の事務局職員2名、添乗員1名の合計28名でした。

団長として、結団式のあいさつでは、中学生平和研修派遣事業の目的を確認し、皆さんには、「市・町の代表として、広島平和記念式典に参加し、犠牲者に鎮魂の祈りを捧げ、平和の尊さを直に体験して、現地での活動内容で感じたことと、考えたことを同年代の中学生、更には地域の方々に伝えていくこと」、「みんなで平和な社会を守り、築いていく事の大切さを伝えていくこと」をお願いしました。

出発当日、下野市役所ロビーで出発式を行いました。早朝にもかかわらず保護者の方々や下野市教育委員会教育長をはじめ、多くの関係者の方々に見送られ、自治医大駅を出発しました。時間の長い道中でしたが、子どもたちはこれから迎える様々なイベントを楽しみにしている様子が見え、広島駅に到着すると天候に恵まれ、真夏の強い日差しの中、研修日1日目を迎えることができました。

1日目は、まず広島平和記念資料館を見学しました。明日の式典に参加する各国大使も多数見学していて、改めて世界的な式典だと感じました。資料館には、被爆者の遺品、被爆の惨状を示す写真や資料が展示されていました。展示物と併せて音声ガイドの説明により、被爆の実相がよく分かり、たった一発の原爆により多くの尊い命が奪われ、多くの人達の人生を狂わせてしまう兵器の恐ろしさや危険性、戦争の悲惨さを強く感じました。また、自分たちと同年代の多くの子どもたちが犠牲になったこともあり、生徒たちは暗い展示室でしたが、一生懸命にメモを取りながら、一つ一つの展示物を真剣な眼差しで見ました。次に広島二中原爆慰霊碑を見学しました。爆心地から600メートルの所で疎開作業していた生徒と教員がほとんど即死、その多くは遺骨の判別もできない状況だったそうです。慰霊碑には犠牲となった生徒と職員の名前が刻まれていました。続いて、下野市・壬生町の中学校の生徒たちが折った「千羽

鶴」を「原爆の子の像」に奉納しました。「原爆の子の像」が作られるきっかけとなった佐々木禎子さんについて、資料館で学んでいたのも、奉納する時に平和の祈りを込めて手を合わせている団員もいました。次に「原爆ドーム」を見学しました。「原爆ドーム」は爆心地から約160メートル離れた所にあります。爆心地周辺の地表面の温度は3,000度から4,000度に達したそうです（鉄が溶ける温度が1,500度）。実物を目の前にして、改めて原爆の威力や悲惨さを痛感しました。1日目の最後に行った被爆体験伝承講話会では、写真や絵を示しながら、被爆後の悲惨な状況や核兵器の恐ろしさについて、話していただきました。体験者の方から直接話を聞くことで生徒達の心に響いたと思います。

2日目は、被爆78周年の平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）に参列しました。多くの国からの参列者の姿もありました。式典では、まず、原爆死没者の慰霊のための式辞、献花、黙とうを行い、平和の鐘がならされました。そして、広島市長の「平和宣言」、こども代表による「平和への誓い」がありました。広島市長による「平和宣言」の中では、かつて祖国インドの独立を達成するための活動において非暴力を貫いたガンジーの「非暴力は人間に与えられた最大の武器であり、人間が発明した最強の武器よりも強い力を持つ」という言葉を紹介し、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすと力強く宣言していました。また、小学生代表による「平和への誓い」では、「今、平和への思いを一つにするときです。被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます。」（抜粋）と力強く誓いを述べていました。改めて一人一人が平和な世界の実現に向けて、できることを考えて実践していくことが大切だと思いました。参加した生徒たち一人一人も平和への思いや考えを新たにしました。2日目の夜には、原爆ドーム前の元安川で灯ろう流しを行いました。生徒一人一人が自分で考えた平和へのメッセージを書き込んだ灯ろうを流しました。様々な色の灯ろうが幻想的で美しく思わず見入っていました。また、とても多くの方が参加していて、被爆者の方々への鎮魂と恒久平和に対する強い思いを改めて感じました。

3日目には、袋町小学校平和資料館に行きました。爆心地から460メートルの位置にある袋町小学校は、原爆によって大きな被害を受けました。被爆直後から被災者の救護所として利用された校舎内の壁面には、被爆者の消息などを知らせる「伝言」が数多く刻まれていました。とても熱心に見学する生徒に資料館の方が丁寧に説明してくれました。被爆後から10か月後に再開した学校の様子の写真等から、生き残った先生や町の人々の努力を知ることができました。

この3日間の研修で、派遣団一同多くのことを学んだり、感じたりすることができました。私たちは当たり前のように平和な生活を送っています。しかし、この平和な生活があるのは、終戦後、多くの人たちが苦しい環境の中、復興に向けて努力したり、平和を願い続けてきたりしたからです。現在、他国への不当な侵攻による戦闘、宗教の違いによる戦争、隣国を威嚇するための核兵器の開発など世界の至るところで平和を脅かす、情勢不安定な状況になっています。多くの尊い命が失われる惨劇が起こらないよう恒久平和を願うばかりです。また、参加した生徒たちは、現地で犠牲者に鎮魂の祈りを捧げ、平和の尊さについて、自分の目で見て、耳で聞いて多くのことを学び感じてきたと思います。現地での活動内容で感じたこと、考えてきたことを家族、同年代の中学生、更には、地域の方々に伝えてもらい、みんなで平和な社会を守り、築いていくことの大切さを発信してもらいたいと思います。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださった市当局の皆さま、準備や送迎に協力くださった保護者の皆さま、学校関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。



「広島を訪れて」

南河内小中学校9年 小池 亜路葉

広島に原爆が投下されてから78年経った今年、私は中学生平和研修派遣団として広島を訪れることができました。昨年の平和記念学習は中止になってしまい残念に思っていたのですが、今回チャンスをいただき、貴重な体験が詰まった有意義な3日間を過ごすことができました。

広島を街を見て最初に思ったことは、復興力の高さです。広島は、路面電車が走り高層ビルが建ち並び、活気にあふれていました。本当に原爆が投下された街とは思いませんでした。

私たちが最初に向かったのは、平和記念資料館です。資料館の中には海外の方も多く、平和記念式典が世界的にも重要な式典であることを実感しました。展示品は写真や絵だけでなく燃えた子供服やレンズの割れた眼鏡など、当時そこに生きていた人の証拠があり、同じ人間が原爆に遭ったことを私たちに教えてくれました。残酷な戦争の記録を見るたびに、胸が締め付けられました。私は展示品の中で、ある絵が今でも記憶に残っています。写真だけでも恐ろしさは十分に感じられますが、モノクロの写真では感じられない、色が付くことで伝わる怖さがありました。被爆した人、一人一人が感じた恐怖や絶望が、私にも見える気がして、より怖さが増したからです。

今回の平和記念学習で、特に印象に残ったものは灯籠流しです。川面に浮かぶ色とりどりの灯籠は、とても美しく感動するものでした。しかし、この景色も残酷な戦争があったから見られる風景だと感じ、複雑な気持ちになりました。私は、自分の灯籠に平和の二文字とカンナの花を描きました。自宅で平和と書いたときは、世界が平和になってほしいという思いだけで書きましたが、灯籠を流すときには、平和は当たり前ではなく、ありがたいものであり、戦争の記憶を風化させてはいけないという強い思いを込めて流すことができました。

私は、この3日間で平和の尊さを目で見て耳で聞いて感じることができました。今後は私が体験したことを家族や友達、そして地域の人に伝える活動を行っていきたいです。私の学校は小中学校なので、小学校低学年の児童にも文化祭の発表などを通して、戦争や原爆について感じたこと、考えたことを発信していきたいと考えています。また、平和な世界をつくるためには、助け合い、互いの違いを認め合うことも必要だと思います。「ありがとう」や「ごめんなさい」などの気持ちを伝えることは簡単そうでも、なかなか難しいこともあります。しかし、何事も継続していけば、大きな力に変わると信じています。

最後に、貴重な体験をくださった下野市、壬生町の職員の皆様、引率してくださった先生方、本当にありがとうございました。

「平和と命の尊さを学んで」

南河内小中学校9年 野尻 恭佑

僕は、初めて訪れる広島に少し緊張しながら足を踏み入れました。駅を出て真っ先に目に飛び込んだのは、ビル群や走行する路面電車。駅前はどこも人であふれていて活気があり、目の前に広がるその光景は、世界で初めて原子爆弾が投下された街とは到底信じられないものでした。僕は、復興に努めた広島県民の生きる力強さを感じました。

平和記念資料館では、遺品の数々や原爆投下直後の写真などが展示されていて、その生々しい惨状は思わず目を背けたくなるほどでした。戦争を知らない僕でも当時の悲惨な状況は容易に想像することができ、原爆は大人や子供関係なく全てを奪っていくのだと改めて感じることができ、心が痛みました。

荘厳な雰囲気で行われた平和記念式典では、平和の鐘が鳴る中で黙とうが行われました。僕たちを含め、全国から約5万人が参列しましたが、国内だけでなく海外からの参列者も多くみられたのがとても印象的でした。そして、その日の夜に行われた灯籠流しでは、多くの人が原爆ドーム前を流れる元安川に集まっていました。平和への願いが込められた沢山の灯籠が流れていく様を見て、僕は胸が熱くなりました。原爆投下から78年。8月6日を広島で迎えられたことは、僕にとって一生忘れることのできない特別な日になりました。

2日目に乗った路面電車は、650型電車で通称被爆電車と言われるものでした。原爆投下時に被爆したこの電車は、線路設備と共に大きな被害を受けましたが、わずか3日で運転を再開したそうです。全てを失ったあの日から現在も走り続けている被爆電車は、復興の象徴だと思いました。

しかし、復興を遂げる一方で元に戻らないものもあります。それは、被爆者の心と身体です。被爆者の講話では、大火傷を負って水を乞いながら亡くなる人が多かったことや息を引き取った家族に火をつけなければならなかったことなど、辛い経験を知ることができました。為す術もなく失われていく命を目の当たりにし、生き残った人たちもまた罪悪感を抱いてしまったそうです。そして、無傷で助かった人も数年後にはがんを患うなど、今でも被爆の後遺症は続き苦しんでいます。その被爆した方々が口を揃えて訴えていたのは、日本の核兵器に対する危機意識と関心の低さでした。僕はハッとしました。ロシアのウクライナ侵攻は、以前は連日メディアが戦況を報じ、僕自身も関心が高かったのですが、報道が減ると同時に他人事になってしまい、今では話題にすることも少なくなりました。現在の核兵器の威力は、最大で広島の際の約3,300倍もあり、20発で日本を滅亡させることが可能だそうです。

戦争を知らない僕たちにできることは、被爆者の心から願う平和、命の尊さを後世に伝えていくことだと思います。危機意識も途切れさせてはいけません。僕は、この研修で戦争や原爆の恐ろしさを直接見聞きすることができました。そこで感じたこと、考えたことを友人や家族など身近な人に伝えることから始めたいと思います。

## 「広島で学んだこと」

南河内第二中学校 3年 金沢 千世

1日目の見学が終わったとき、私は原爆の悲惨さを侮っていたなと感じました。原爆によって多くの人々が傷つき、亡くなったことは知っていましたが、相応に様々な体験をする覚悟をもっていたつもりでした。けれど、平和記念資料館でみた写真や遺品、被爆者講話で聞いた内容は、私の想像を超える悲惨さでした。

原爆が投下されたとき、落下地点付近では3,000度から4,000度の高温でした。2キロメートル以内にあった木造建築の建物はすべて燃えてしまったそうです。鉄の溶けはじめる温度がおよそ1,500度なことからも、どれほどの高温だったのかわかります。その異常な高温によって多くの人々がフラッシュバーンという特殊な火傷を負いました。フラッシュバーンの影響で皮膚が垂れ下がった人々の集団は、まるで幽霊のようにみえたと聞きました。この火傷は人間が体感できる最大の痛みとも言われているそうです。同じ人間に対してこんなにも惨いことをさせてしまう戦争はとても恐ろしいものだとはあらためて感じました。

2日目には、平和記念式典に参加しました。会場に入っただけで、外国人の参列者の数におどろきました。今年の参列国は過去最多の111か国だったそうです。核兵器の被害について世界が重く考えているのだなと思いました。式典の中で、広島市長や県知事、総理大臣など多くの人々が広島や戦争、平和に対する思いをスピーチしていました。式典の中でも特に印象に残っているのは、広島市のこども代表による平和への誓いです。多くの人々の前でも堂々と自分たちの誓いを読み上げる姿はとても立派でした。誓いの中にあつた、「被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。」という言葉が深く心に残りました。

2日目の夜には、灯籠流しをしました。人々の願いがかかれた色とりどりの灯籠が流れる川は、幻想的な光景でした。その景色に感動したけれど、78年前にはこの川に多くの人々が水を求めて飛び込み地獄のような光景が広がっていたと考えると、複雑な思いでした。

現在、世界には13,000発以上の核兵器があるといわれています。その威力は広島におちた原爆「リトル・ボーイ」の数百倍のものから最大で3,300倍のものもあるそうです。

そして、現在の威力の核兵器およそ15発で日本を滅ぼすことができるといわれています。もしもまた戦争で核兵器が使われるようなことがあれば、その被害の規模は計り知れません。被害者をこれ以上増やさないためにも、核兵器は世界にあってはならないものだとは実感しました。核兵器根絶のためにも、まずは今回の平和研修派遣事業で学んだことをしっかり身近な人に伝えていきたいです。

## 「広島派遣事業を通して」

南河内第二中学校3年 廣田 直央

広島についたとき、本当にここに原爆が落とされたのか自分の目を疑った。立ち並び高層ビル、道の真ん中を走る路面電車、歩道を埋め尽くすほどの人。どれも、原爆が落とされて一世紀もたっていない都市とは考えられない光景だった。だが、平和記念資料館の見学で、その感情は一変した。原爆が落とされた直後の焼け野原の広島の様子、被爆した人々の描いた絵や、やけどを負った姿や原爆症による後遺症の資料、そのすべてが、あの日、広島に生きる人々を恐怖に陥れた原爆が落とされたことを、物語っていた。それらの資料を見たとき、「悲しい」の一言では言い表せないほどの気持ちが入り込んできた。特に印象に残った資料は、原爆が落とされた後に、懸命に救護活動や復興作業をする人々に関するものだ。目を疑うほどに復興している今の広島があるのは、こういった人たちの頑張りがあったからこそなのだと感じた。一日目の最後に、被爆者の高田直久様による被爆体験伝承講話を聞いた。資料館の資料からはわからない、当時の記憶や、人々の気持ち、被害の生々しさが講話全体を通して感じられた。講話の中で特に、「阪神・淡路大震災は8月6日と比べればひどくない。」という言葉が強く印象に残った。大震災でもあれだけひどかったのに、それよりもひどかった原爆はどれだけ大きな傷を人々の心と体につけたのだろう、と考えるだけで、心が痛かった。この世界から核兵器を根絶させなければならないという気持ちがより一層強くなった。

3日間の活動の中で特に印象に残ったのは、平和記念式典だ。111か国から大使などが訪れ、外国から来ている人もたくさんいた。それだけ世界中の人々が平和や核兵器根絶に対して関心を持っていることに感動した。こども代表による、平和への誓いの、「誰もが平和だと思える未来を広島に生きる私たちがつくっていく」という言葉が、自分の心に刺さった。広島の人々だけでなく、世界で唯一の被爆国である日本の国民全員がやらなければならないことだと私は思った。

このような3日間の派遣事業を通して、自分がいま平和に暮らせているということは当たり前ではないのだと実感した。一人でできることは小さなことかもしれないが、平和な世界を作るためには大きな一歩になると私は思う。原爆、戦争の悲惨さを伝えていくためにも、自分が今回学んだことを、積極的に、家族や友人に発信していきたい。

## 「広島派遣で学んだこと」

石橋中学校3年 黒澤 茉央

私は、今回この派遣に中3生として参加しました。昨年の派遣事業に参加できなかった私たちにまたとない機会を与えてくださったことに感謝しながら、多くのことを学び、考えることができました。

私は、小さいころに見た石橋図書館での原爆をテーマにしたパネルの展示や、中学2年生で使った原爆に関する教材から本当にこんなことが昔の日本で起きたのか、と衝撃を受けました。このような経験から、派遣事業に参加し、広島を訪れましたが、そこには原爆の爪痕を感じさせない、活気あふれるまちがありました。多くのビルが建ち並び、78年前はたくさんの死体でうめつくされていた相生橋周辺も、今では人々の憩いの場となっていました。改めて、広島復興力の高さや人々の努力を強く感じました。

1日目に訪問した平和記念資料館では、さっきまでの広島が発展した町並みから一転、私たちにあの日の現実と原爆の恐ろしさを突きつけました。特に、被爆者の方が描いた当時を表す絵は、写真よりも生々しく、被爆者の方々の叫びが伝わってくるように、私は感じました。また、その日の内に見学した原爆ドームも、今の広島風景からは明らかに浮いていて、むき出しの骨組みや地面をうめつくすがれきが、今を生きる私たちに原爆という恐ろしい、でも確かにあった存在を知らしめてくるようでした。被爆者講話では、原爆が多くの人を傷つけ、命を奪い、生き残った人にまでも深い傷跡を残したということが分かりました。このように多くの人々の命や人生、幸せを奪う原子爆弾や戦争は、絶対に起こしてはならないと強く思いました。

2日目に参加した平和記念式典は、厳粛な雰囲気の中で行われました。実際に参加することで、現地だけでなく日本中、世界中の人々が平和を願っていることが分かりました。灯ろう流しでは、灯ろうの優しい光で川があふれていました。でも、このきれいな景色はあの原爆の惨状があったからこそなんだと思い、改めて平和の尊さを感じ、それを広めることの重要さも、同時に感じました。

3日目は、袋町資料館に行きました、伝言から被爆者の方々が必死に家族を探していたことが分かり、思いの強さに胸を打たれました。また同時に、私が家族や友達と笑って楽しく過ごせるのは本当にありがたいことだと感じました。

この3日間を通して、私は原爆の恐ろしさや残虐さ、そして平和の尊さを学びました。しかし、これを伝えていかなければ意味がありません。原爆投下から78年の時が経ち、被爆者の方のお話を聞けなくなるまでそう長くはありません。だから、私たちが原爆の記憶を繁げ、平和を訴え、誰もが笑っていられる未来への第一歩となるよう、この経験を忘れず伝えていきたいと思えます。

## 「あの日」の伝承

石橋中学校3年 一野谷 碧羽

今回の広島平和研修派遣団を通して、学んだことが3つあります。

1つ目が、あの日、広島で何があったかです。この3日間で私にとって最も印象に残っていることは、実際に被爆してしまった方の講話です。資料館で写真や絵、また、書かれている説明を見ているだけでは伝わらないキノコ雲の下の情景や声、人々の心情など様々なことを話していただきました。また、あまり知られていない原爆が落とされた日の翌朝の情景を話していただいたとき、母を探す子供や家族の遺骨を探す人を想像しました。もし、自分がその立場だったらということを想うと震えが止まりませんでした。

2つ目は、現在の広島についてです。現在ではあの日と比べて緑が豊かになったり、大きな建物が立ったりして発展しています。しかし、その中でも、原爆ドームをはじめとして、被爆してからそのままの建物、あの日走っていた列車、壁に残る伝言のあとなどあの日のまま残されているものがたくさんありました。原爆ドームと同じように、あの日のことを思い出したくないという理由で残すことに反対する人もたくさんいたと思います。しかし、その意見を押し切って、私たちのようなあの日のことを知らない人にも知ってほしい、あのようないいことがあってはならないということを伝えるために残していると思いました。私はそのような建物を見るたびに、残してくださった人や自分の見たくないという気持ちを抑えて伝承してくださった人に感謝しました。

3つ目は、あの日の伝承の仕方です。現在、被爆者の平均年齢が85歳を超え、伝承者が減少しています。その中で、私たちにできることは、広島に行き、実際に見て感じたことを伝えていくことだと思います。私たちが感じたことは、被爆していない人にも伝えられると思います。被爆者の方から聞いたことを第三者の視点から伝えることで被爆者の講話とは違った感じ方ができると思います。

これらのことが、私が広島に行って学んだことです。この経験をどう生かすかは私たち次第ですが、多くの人に伝え、栃木県から全国へ、全国から世界へ核兵器の廃絶や平和の尊さを訴えていけるよう頑張ります。



「平和に向かって・・・」

国分寺中学校3年 上野 紗耶加

78年前、原子爆弾によって大きな被害を受けた広島。同じ日、同じ時間、同じ場所に立った私は、自分の周りにはいる外国人の多さに驚きました。世界で唯一原爆が投下された日本に、世界中の人が関心を持っていることを実感しました。

8月6日。平和記念公園で行われた平和記念式典の広島市長挨拶にて、市長は、「核抑止論は破綻していることを世界中の指導者は直視するべきだ。」と語っていました。確かに今の世界情勢を振り返ると、核抑止論が私たちの平和を導いているとはとても思えませんでした。

私は被爆した方のお話や、原爆資料館の展示から、たった一発の原子爆弾が奪ったものの規模の大きさを知りました。3,000度にもなった地表で、動かなくなった子供の名前を半狂乱で叫ぶ母親。痛覚がむき出しになって、人が感じる最大の痛みを感じながら倒れていく人々。死体で埋め尽くされた道や川。誰にも看取られず、たくさんの方が死んでいく中、自分だけ生き残ったことを責める人。それまで確実に存在していた「今」が、ほんの一瞬で奪われてしまいました。このような核兵器を持つことは、たとえ平和を目指した抑止論のためだとしても、絶対にあってはならないことだと強く感じました。そして、核抑止論が破綻しているのであれば、なおさらのことであると思います。

しかし、世界で唯一の被爆国であるにもかかわらず、核兵器禁止条約に参加していないのも日本の現実です。参列していた多くの外国の方の住む国では、この条約に調印しています。それなのに、日本が調印していないという事実には、私は驚きました。それは、被爆国としての責務を全うしておらず、核のない平和に対して前向きな姿勢であるとは言えないと思いました。私は日本人として、このような現状を変えていかなければならないと感じました。

原爆が投下されてから78年…被爆した方々が高齢化し、その人口が減っています。原爆の記憶を風化させないために、この経験を伝えることが、核のない平和に繋がっていくのだと思います。私は原爆が投下され、痛みや苦しみから復興した広島で、学んだことや感じたこと、考えたことを身近な人をはじめとした多くの人へ語り継いでいきます。



## 「私たちの宿命」

国分寺中学校3年 佐間田 源

「日本人として、この惨状を知らないわけにはいかない。そして、平和についてこのままではいけない」。

私は広島での3日間を過ごすうちに、そのような考えになりました。1945年8月6日、広島のに一つの原子爆弾が落とされ、多くの命が奪われました。あの悲劇から78年がたった今年、私は派遣団員として広島での3日間を過ごしました。

1日目、広島駅から降り立ち私が最初に感じたことは「本当にこの地に原子爆弾が落とされたのだろうか」ということでした。ビルが立ち並び、多くの人々が行き交うこの街に原子爆弾が落とされたとは、到底思えませんでした。しかし、同時に多くの人々が街の復興に向けて尽力してきたのだと思いました。

2日目、この日は平和記念式典に出席しました。会場に入り、すぐにその空気の重さを感じました。式が始まり、私は2つのことが気に留まりました。1つ目は、小学生代表の「平和への誓い」です。大人ではない、私たちよりも若い子どもたちが、平和について考え誓ったことは感慨深いものがあり、鳥肌が立ちました。2つ目は、式中に聞こえてくる「デモ」の音です。平和に関する式中に、平和に関するデモが、首相や各国大使に向けて行われていました。「今すべきではない」と思う反面、こうしなければ思いは届かないのか、と思いました。

3日目、袋町小学校平和資料館を見学しました。そこには、被爆当時に書かれた、家族や友人に向けた数多くの悲痛な伝言が残されていました。また、私たちに向け、館長さんが平和について話をしてくださいました。現代社会での核の脅威について学び、今の大人だけでなく私たちのような子どもが考え、行動を起こしていかなければならない、と感じました。

現代では、被爆者の平均年齢は85歳を超え、被爆の体験も風化の道をたどってしまっています。そのような中大切なことは、この現状をそのままにするのではなく、私たちのような若者が変えていかなければいけません。平和について学び、考え、伝えていくことで、次の世代につなげていくことが大切だと思います。その第一歩として、私は日本人として、派遣団員として、この惨状や平和について考え、広めていきたいと思っています。

最後に、このような機会を与えてくださった市職員や保護者をはじめとするすべての方々に心から感謝申し上げます。

## 「私が3日間で感じたこと」

南河内小中学校8年 上野 夏凜

今回の広島派遣の抱負として私が掲げたのは、現地で原爆の恐ろしさを知り、記憶の風化を防ぐにはどうすれば良いかを考える、というものでした。この抱負を掲げた理由は、国語の授業で、被爆者が減り、人々の中で原爆の記憶の風化が叫ばれているなどの内容を学び、自分が少しでもできることを探したかったためです。

3日間の派遣を通し、印象に残った場所が2か所ありました。

1か所目は、平和記念資料館です。原爆について事前に調べていたものの、被爆者の遺した物を実際に目にすると、思っていた以上に衝撃を受けました。被爆者や遺族の音声の再現はまるで、そこにいるかのように、「あの日」を訴えるようでした。また、後遺症を負った人々の写真や焼け野原の写真、炎に包まれた絵、全てが記念資料館に訪れた人を言葉にならない感情にさせていて、時には涙を流す人も見られました。

2か所目は、元安川です。そこでは灯ろう流しを行いました。78年前、この川に架かる橋を狙って、原爆は落とされました。爆心地に近いこの川には多くの人が水を求めて飛び込みましたが、助からなかった命も多かったと聞きました。今の元安川からは、たくさんの死体が流れ、ただよっていた情景が想像できませんでした。多くの人が流した、色とりどりの灯ろうが光る川を見て、被爆し亡くなった方や悲しい歴史の記憶が忘れられることなく、たくさんの人々の心の中に残っていることに気づかされました。

また、私が見てきたのは、そういった過去だけではありません。復興した広島は、資料館で見た焼け野原の写真からは考えられないほど、豊かでした。多くの人、高いビルに、にぎやかな公園。人々の笑顔があふれていました。式典の際、平和への誓いを宣言した小学6年生の二人の話の中に、「命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。」という言葉がありました。「あの日」には今語られている以上に、見えていなかった涙、聞こえていなかった悲鳴があったはずです。痛みや辛さを乗り越えて、発展させてきた広島の人々には、現在の輝く広島の姿を見せたいと思いました。

私はこの3日間を通して、苦しい歴史をもつ中で人々の努力があったことをあらゆる場所で感じました。そして、記憶の風化を防ぐにはそういった歴史を伝えていくこと、実際に広島へ向かい、自分の目や耳で原爆について知ることが大切だと改めて考えました。平和をつくっていくのは、人です。広島の人々の強い心に負けないよう、生きていこうと思います。

## 「語り継ぎたい平和への思い」

南河内小中学校8年 榎戸 碧空

私は、中学生平和研修派遣事業に参加し、実際に広島で学び、自分が想像していたよりも戦争は恐ろしく、脅威であることに気づきました。そして戦争は二度と繰り返してはいけない、平和のために、自分たちが後世に語り継いでいかなくてはならないという思いが、より一層強くなりました。

1日目に広島の前爆の伝承者である高田さんの話を聞きました。1945年8月6日、広島に原子爆弾が投下され、辺り一面が焼け野原になったとき、高田さんはまだ生後24日でした。高田さんは周りの人から話を聞き、私達にあの日の生々しい様子を伝えてくれました。国語の授業の「壁に残された伝言」では、「あの日」を生々しく語れる人が少なく「被爆体験の風化」という言葉がありました。原爆投下から78年の月日が経ち、当時を知る人が少なくなる今、伝え聞いたことを、語りついでいくことの大切さを感じました。また、現在、世界で保有されている核ミサイルは、広島に落とされた原爆「リトルボーイ」の約130倍もの威力があり、約20発で日本を壊滅状態にしてしまうことには驚きと恐怖を強く感じました。

2日目は、平和記念式典に参加しました。式典には過去最多の111か国の大使や海外から来日した人、日本各地から来た人など、小学生から高齢者の方まで大勢の参加者がいました。今年はG7広島サミットも開催され、核兵器の脅威について多くの人々が真剣に考えていたのだと思います。黙とうの時、一人一人の平和への思いや願いが一つになったような気がしました。私はその時の雰囲気を一生涯忘れないと思います。

私は日本で平和に暮らせることは、ごく当たり前のことだと思っていました。しかし、それは、多くの苦勞を乗り越えて、戦争から復興し、平和を守ってきた人々のおかげだと分かりました。日本の平和がこの先ずっと続くように、そしてこの平和が日本から世界へと広がっていくように、私は家族や友人などに自分が広島で学んできたことを伝えていきたいと思います。

最後に、貴重な体験をさせてくださった下野市職員の皆様、先生方、本当にありがとうございました。4年ぶりに実施できた下野市壬生町中学生平和研修派遣事業に参加できたことを心から感謝しています。



## 「平和とは」

南河内第二中学校2年 葭葉 香織

私は、この派遣事業に参加するにあたって、「平和」という言葉の深い意味を見つける」という自分の目標を立てました。普段、私達も何気なく言っている、「平和」という言葉には、もっと深い意味があるのではないか。どんな姿が「平和」と言えるのか。それを追求することを一つの課題とし、私は広島へと向かいました。

広島駅に着き、駅から出たとき、私は目を見張りました。私は初めて広島へ訪れたのですが、事前に広島は原爆を落とされた場所だと教わっていなければ、ここは大勢の命が失われたということに気付かない程発展していたからです。見上げる程高いビル、街のあちこちに生い茂っている青々しい木々、笑いながら歩く人々。被爆から一世紀も経っていないのに、ここまで発展できるのか。正直、信じられませんでした。

1日目に行った平和記念資料館では、本当に多くの原爆の実態について学びました。丸焦げになった三輪車、ところどころ千切れている服、人かげの残る石。展示されているもの全てが、今の私達に何かを語りかけているような気がしました。同日に行った被爆体験講話では、被爆者である高田さんと、高田さんの知人の方の話を伺うことができました。平和記念資料館では、資料を見て考えるので、あの日のことを想像することしかできなかったのですが、高田さんの話を伺っていると、まるで自分があの日の広島に立っているかのような感覚に陥りました。同時に、資料館で見た数々の資料が頭の中で結びつき、今ここは原爆が落とされている、と錯覚してしまうほどでした。

2日目の朝は、平和記念式典へと参列しました。会場に入りきらない程の多くの人々が、平和を願い、みんなが一つになっているのだと感じ、とても感動しました。式典には、外国の方も大勢参列していました。過去に目を背けず、これからも平和を守り続けていってほしいなと切実に思いました。その日の夜は、灯ろう流しを行いました。夜の本安川には、たくさんの灯ろうが流れていて、きれいだなと思った反面、この川には川面が見えなくなる程の多くの人々が浮いていたのだと考えると、本当に複雑な気持ちになりました。灯ろうを流している方々は、みんな平和への願いを書き記していました。

私が今回の派遣事業で「平和」とは何かを見つけられたのは思いもよらない場所でした。それは、被爆体験講話を聞いた帰り道の公園でした。元気に遊ぶ子供達。それを見守る温かい親。それを見て、この雰囲気平和なのだと思えることができました。

この派遣事業で体験させていただいた貴重な経験を、まずは身のまわりから、徐々に大きい所へと「平和」について伝えていこうと思います。本当にありがとうございました。

## 「広島原爆の事実」

南河内第二中学校2年 荻原 陽香

「あの日」の事実は教科書通りで、教科書以上でした。

今回の平和研修派遣事業で一番印象に残った場所は、平和記念資料館です。ここには、原爆の被害にあった人々の私物や当時の写真が残されていて、原爆が投下された1945年8月6日、その日にあったことがそのままの状態で見られていて、そこだけその日で時が止まっているようでした。本館では、外国の人達も大勢いました。しかし、会場はとても静かでした。聞こえるのは原爆の資料を見た人の驚きの声ぐらいで、笑い声や話し声はほとんどありませんでした。私は正直すごくこわくて、となりにいた友達の手をにぎりました。写真の中には、背中が焼けて黒くなっている人や、皮ふがはがれ血だらけになった人が写っていました。それを見て私は、思わず涙が出てしまいました。写真以外にも被爆された人の衣服やめがねなどが展示されていました。めがねはほぼ原形をとどめておらず、衣服は全部茶色でぼろぼろでした。この服は原爆が落とされる前、どんな色だったのだろう、この人は当時何を思ったのだろう、と考えても私が答えを見つけ出すことは不可能でした。原爆によって原爆以前の広島の姿を見ることはできないからです。

次に印象に残った場所は、袋町小学校平和資料館です。ここは、国語の教科書にある「壁に残された伝言」の題材となった場所でした。爆心地から460メートルの位置にあり、建物内にいた人のほとんどが命を失ったそうです。この壁には、行方不明になっている人を探しに訪れた人々の伝言が残っていました。行方不明の人と探している人の名前、年齢、住所を表した地図などが書かれていて、その中には残念な結果が書かれているものもありました。読み取れる文字も読み取れない文字もありましたが、内容は誰かを探していること、何かを伝えようとしていることが書かれているのは確かでした。

私が広島へ行った日、本当に78年前、ここに原爆が落とされたのか信じられない程美しく豊かでにぎやかな広島が目の前にありました。しかし、原爆が投下されたことは事実で、自分が思っていたより、とてもひどく悲惨でした。今回、見て聞いて感じたことは信じられないよりも信じたくないというのが本音でした。教科書に載っていたのは事実だった、しかし、教科書には載せられない、分からない事実が広島にはありました。これを多くの人に知ってもらうため、家族、友人に伝えていきたいと思っています。今回の研修で学んだことを忘れず、伝え続けて、過去、現在、未来をつなげていきたいです。

## 「広島平和研修を通して」

石橋中学校2年 前田 華音

私はこの研修を通して、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ、生命の尊厳について学ぶことができました。初めて訪れた広島は、「本当にここに原子爆弾が落ちたのか」と思うほど活気にあふれていました。最初に見学した平和記念資料館には、展示されている服や写真、被爆したコンクリートがあり、原爆が落ちた事実を私にはっきりと教えてくれました。入館者も多く、中には目を潤ませている人もいて、原爆の恐ろしさをみんなで実感したような気がしました。

また、広島二中原爆慰霊碑では、自分と同じ十代の多くの命が犠牲になったことが、展示と違って肌で分かり、胸が張り裂けそうな思いになりました。原子爆弾はあってはいけないもので戦争もしてはいけないと改めて強く思いました。

その思いを胸に、原爆の子の像で千羽鶴の奉納を行いました。その日も全国の学校から来たのか、制服を着た子たちが色とりどりのたくさんの折鶴を奉納していて、多くの人々が平和を祈り、心を込めて折ったものがここにあるのだと思うと感動しました。私も、学校みんなの思いを、代表としてしっかり捧げられて、とても嬉しかったです。

その後、実際に被爆された方々の貴重なお話を聴くことが出来ました。おそろしく生々しい内容や真剣な眼差しを見て、より多くの人にこの話を直接聞いて、平和について考え、語りついで欲しいと思いました。

平和記念式典では、被爆者や遺族だけでなく、私のような若者や111か国の人々など多くの参加者がいて平和への思いを持つ人々の多さを改めて実感しました。特に、小学校6年生の子ども代表が言った「命をつないだからこそ、今私たちは生きている」「今、平和への思いをひとつにする時」という言葉は、平和を願う気持ちは年齢に関係ないことを強く感じ、感動し、私の思いも強くなりました。

また、この式典に参加したことによって、今の生活が平和であることを実感し、普段の生活に感謝の気持ちがわいてきました。

最後に行った袋町小学校平和資料館は、国語の授業で行った「壁に残された伝言」の舞台でした。授業でやったはずなのに、爆風で破けた太鼓の展示は、あまりにも現実離れしていて、どんな爆風がここを通り抜けたのか想像もできませんでした。

私はこの3日間を通して、行く前に知っていたつもりになっていた核兵器の恐ろしさを肌で学び、今の平和な生活がどれだけ幸せかを知ることが出来ました。私のように知ったつもりになり、平和の大切さに気付いていない人も多いと思います。だから私は、この研修で体験してきたことを私なりに、身の回りの人たちに伝えていきたいです。

## 「平和研修を通して学んだこと」

石橋中学校2年 橋本 悠来

私は今まで平和とは何かを考えたことがなかったような気がします。78年前の8月6日、広島に原爆が投下され、多くの人々が亡くなりました。広島に行く前は正直、軽い気持ちだったかもしれません。しかし、実際に現地に足を運んで、当時の状況を聞けば聞くほどあの日の広島が残酷だったことを知りました。

1日目の原爆ドームでは、実際に近くで見ると、今にも崩れそうで、どことなく重たい空気が流れていて、原爆の怖さを実感できる場所でした。平和記念資料館では、黒焦げになった洋服や崩壊した建物の一部が展示されており、原爆の威力がどれだけ凄いものだったのかと思ったのと同時に、本当にこんなことが日本で起きたのだろうかという悲しい気持ちになりました。広島二中の慰霊碑や千羽鶴奉納では、ここで私と同じ位の年齢の子供達が多く亡くなったことを想像しました。熱くて、痛くて、苦しかっただろうなという思いが頭の中を駆け巡り、私は今、平和な世の中にいる感謝の思いを噛み締めながら参拝しました。

被爆者体験伝承講話会では、原爆が落ちた直後の様子を詳しく知ることができました。熱線により皮膚が垂れ下がり、次々と倒れていく人を目の当たりにしたそうです。聞いているだけでも怖く、耳を塞ぎたくなるようなお話でした。

2日目は、晴天で、当時の状況を思い描きながら、平和記念式典に臨みました。子供達の平和への誓いでは、自分の思いを伝える前に相手の気持ちを考えること、みんなの笑顔の為に自分の力を使うこと、という力強い言葉が印象に残りました。午後は世界文化遺産にも登録されている宮島へ行きました。多くの観光客で賑わっていて、鹿を見たり、水族館に行ったり、とても充実した時間を過ごすことができました。厳島神社はとても迫力があり、美しかったです。夜は灯ろう流しに参加しました。二度と戦争が起こりませんようにと願いを込めて流しました。多くの人々が参加していて、平和への関心が高いことが伝わってきました。

最終日は、袋町小学校平和資料館へ行きました。そこで見た黒い壁の伝言板は、原爆の被害にあった方々の伝言を書き残したもので、唯一の鉄筋コンクリート造りだった為、無くなることなく残ったそうです。一つ一つのメッセージがとても心に響く内容でした。

そして、今回の研修では、他校の生徒と交流を図ることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

一人一人が思いやりを持ち、身近なところから少しずつ行動に移していくことが平和に繋がる第一歩だということを念頭に置き、命の大切さ、平和の尊さを未来へ繋げていけるよう、今回の学びを多くの人々に伝えていきたいと思います。そして、日々、感謝の気持ちを忘れず、精一杯生きていこうと思います。私は戦争のない、笑顔溢れる世界になることを強く願います。

## 「広島派遣を経て」

国分寺中学校2年 柿沼 希々果

皆さんは、「ヒロシマ」と聞くと何を思い浮かべますか。私は「原爆」の言葉を思い浮かべます。今回の下野市・壬生町中学生平和研修派遣事業に参加し、広島の地に降り立ったとき、そこには緑豊かで笑顔あふれる光景が目に入り、78年前に本当にここに原爆が落ちたとはとても思えませんでした。そんな広島で心に残った事が3つあります。

1つ目は平和記念資料館です。訪れる人の多くが外国人だったことから、核兵器の必要性について世界中の人々が考えているのだと思いました。そして、資料館には、たくさんの写真や遺品、被爆者が描いた絵などが展示されていました。それらは、この世のものとは思えないくらい悲惨で、絵で描かれた血まみれの人や火傷で皮膚がただれた写真を見たとき、恐怖で胸がいっぱいになりました。また、当時の男子中学生が着ていた服が焼けてボロボロになっているのを見て、どんなに辛く、苦しく、熱かっただろうと考えると思わず涙が出てきました。被爆して10年後に白血病でなくなった佐々木禎子さんが作った折り鶴も展示されていました。その鶴は、禎子さんが自分の病気が治るように願いを込めて折ったものでした。しかし、願いは叶わず禎子さんは12歳で帰らぬ人となりました。命とは、簡単に奪えるけれど、絶対に戻すことのできない、尊いものなのだと改めて思いました。

2つ目は、平和記念式典です。小学校6年生の子供代表の方が朗読した平和への誓いは、言葉一つ一つが私の心に刺さりました。文章の中に、「誰もが平和だと思える未来」という言葉がありました。私にとって「誰もが平和だと思える未来」とは、戦争や紛争、差別がなく、世界中の人々が笑顔になれる未来です。そこで、周りの人にこの経験を伝えたり、自分にできることを探したりして、身近なところからでも平和になればいいと思います。

3つ目は、袋町小学校です。校舎の壁にはたくさんのかすれた文字がありました。私達2年生は国語の授業で「壁に残された伝言」という教材を使い、平和について学習しました。そこで、袋町小学校の壁の文字について学び、いつか実物を見てみたいと思っていました。実際に見てみると、思いの外薄くかすれていて、教科書やビデオで見た文字しか読み取ることができませんでした。でも、これを書いた人はきっと、会いたくてたまらない人を想って一生懸命に書いたのだと思い、その懸命さに感動しました。

この広島派遣で、私は戦争の残酷さや命・平和の大切さを実感しました。また、平和とは何か、考えることができました。私にとって平和とは、誰もが笑って過ごせることだと思います。そうするためにも、今回の広島派遣で学んだ事をたくさんの人に伝え、改めて平和や命について考えていきたいです。

皆さんにとって、平和とは何ですか。そんな世界にするために何ができますか。そして、是非もう一度、平和について考えませんか。

## 「広島と原爆」

国分寺中学校2年 小倉 全洋

私は、8月5日から7日まで、生命の尊厳や平和の大切さを学ぶために平和研修派遣事業の参加者として広島を訪れました。広島に来て思ったことはたくさんの人がいて経済が発展していることです。それが私が最初に思った広島の印象です。

1日目は広島平和記念資料館に行きました。この資料館は広島に投下された原爆に関する資料を展示している場所です。そこで私は信じられない写真を見ました、原爆が落とされ辺り一面焼け野原になった広島の地。被爆し皮膚がただれた女の子。とても今の広島からでは考えられない光景でした。そして私は原爆の恐ろしさを知り、あってはならないものだと思います。

また被爆者である高田さんの平和講習を受けました。そこで驚いた話は2つあります。1つ目は当時の広島の人々、14万人が亡くなったことです。当時の広島は、道路も整備され、建物が立ち並び経済が発展していました。しかし、たった一つの原爆が人も物もすべて破壊していきました。2つ目は世界に13,000発の原子爆弾がありその威力は広島・長崎に落とされた原爆の何千倍もあるということです。今の原爆を200発落とすと中国が全滅、20発落とすと日本が全滅という威力です。よって一発でもどこかに落とすと取りかえしのつかない大変なことになります。このような原爆の恐ろしさを伝える講話というのは伝承者不足で減っています。戦争や原爆を風化させないということが重要だと感じました。

2日目は広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列しました。平和記念式典は、原爆死没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念するための式典です。私は参列国の数に驚きました。世界で111か国もの国が参列していました。多くの国が協力し核兵器廃絶に力を尽くし、世界恒久平和の実現を目指していると分かりました。

この平和研修で学んだことは2つあります。1つ目は原爆の恐ろしさです。たった一発でたくさんの人が亡くなり、街が破壊されました。とても人が造ったとは考えられません。しかし、まだ核兵器を保有している国があり、核兵器廃絶はできていません。二度とこのような兵器が使われることがないことを願っています。2つ目は平和の大切さです。今の広島は過去に原爆が落とされたとは考えられないほど建物が立ち並び、みんなが笑顔で暮らしています。この平和が、どの国々にもどの人々にも常に続いてほしいと思います。

原爆投下から78年。被爆体験者の平均年齢が80歳をこえ、高齢化が進んでいます。だから若い私達が広島で起きたことを風化させないように家族や友人などに伝えていきたいです。